【資料1】

平成26年度　嬉野市立大草野小学校　学校評価結果（H27.3.6）

1　学校教育目標

未来へかがやけ　蛍っ子！
自らを高めようと、生き生きと学び合う児童の育成

総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする

2　学校経営ビジョン

≪こんな子に≫　◎やりとげる子ども（生活）　◎思いやりのある子ども（特活）　◎たくましい子ども（保体）　◎学び続ける子ども（学習）
≪こんな学校に≫　○子どもの歓声が響く学校　○一人ひとりが生かされ大切にされる学校　○地域に開かれた魅力ある学校
≪こんな教師に≫　○子どもと共に歩む教師　○使命感を持ち率先垂範する教師　○地域や家庭との連携に取り組む教師
≪こんな地域に≫　○我が子も人の子も地域の子　○学校と家庭の連携教（協）育　○益世会・PTA等との連携　○幼保・中との連携
☆　地域ぐるみで子育てを！「子どもは、家庭で躾けられ、学校で学び、地域で育つ。」

このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む

絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする

3　本年度の重点目標

Ⅰ　やりとげる子ども（生活）
（1）当たり前のことが当たり前にできる子どもを目指して全職員が同じ意識で取り組む。
（2）公共のマナーを身に付け、ルールを守る。
（3）児童の危機管理意識を高める。（安全な生活）
Ⅱ　思いやりのある子ども（特活）
（1）思いやりの心を育てる。
（2）自主的・自発的な態度を身に付けさせる。
（3）特別支援教育を進める。
Ⅲ　たくましい子ども（保体）
（1）進んで心と体を鍛え、最後まで頑張る。
（2）規則正しい、健康な生活をおくらせる。
（3）食事のマナーを身に付けさせ、好き嫌いなくしっかり食べさせる。
Ⅳ　学び続ける子ども（学習）
（1）学習意欲を喚起する仕掛けをする。
（2）算数科での学級の実態に応じたTT・少人数指導を推進する。
（3）家読・図書館教育を通して豊かな人間性の向上をめざす。
（4）定着確認テストを実施し、補充指導を充実する。
（5）学習習慣の定着をめざして、保護者・児童への働きかけを行う。

4　前年度の成果と課題

≪成果≫
・一昨年度同様、学校目標でめざしている子どもを育成するために生活部、特活部、保体部、学力向上推進委員会で、教育活動を計画立案し全職員で取り組んだ。項目別評価表に児童・保護者・教職員アンケートの集計結果ポイントを表し、7月・12月の検討会では成果と課題が明確になり、進捗状況を把握しながら次への課題を明確にしてより具体的な改善策を見いだして実践化につなげることができた。
・年に2回学校評価を行い、学校運営のPDCAサイクルを機能させることができ、職員の参画意識が高まっている。
・学校関係者評価委員会では率直な意見をいただき、本校の取り組みについて再検討するよいきっかけとなっている。

≪課題≫
・各部会、推進委員会で具体的目標を達成するために具体的方策に取り組むことができたが、本年度もさらに子どもの実態に即した学校評価の計画を考えたい。
・教職員一人ひとりが学校目標の具現化をめざす参画意識を持ち、日々の教育活動について成果と課題を明確にする。教職員アンケートで、自己評価のポイントが向上しない項目では、一歩前進して取り組む意欲が望まれる。
・学校関係者評価委員の方々に学校の様子を知らせるために、各種学校行事や授業参観に参加できる機会を増やしたい。

重点目標をそれぞれ再掲し、
重点目標ごとに、成果や課題を具体的に評価するためには、どのような評価項目や指標を盛り込むべきかを考える

5　総括表

①　やりとげる子ども（生活）　生活習慣の定着

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
教育活動	○基本的生活習慣の定着	奉仕・協力・勤労などの精神や態度の育成	・礼儀正しい児童を目指す。（あいさつ・返事・掃除）	・あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・掃除の手順や用具の使い方を指導し徹底させる。 ・掃除強化月間を設け、全校で重点的に取り組む。	B	・あいさつの仕方を全校的に再確認したところ、子どものあいさつもよくなってきた。地域でのあいさつもよくできているといった意見が多い。 ・掃除強化週間を年3回実施した。また、職員も児童とともに掃除に取り組み、児童は職員がついていない時でも、自分たちで時間いっぱい掃除に取り組むことができていた。	・掃除については、概ね良好である。次年度は掃除場所ごとの手順をはっきりと示し、場所に応じた掃除の仕方を身に付けさせたい。 ・無言掃除の徹底を今以上によくするために、見学会を引き続き実施する。 ・地域及び学校におけるあいさつの習慣はほとんどの児童が身に付けている。 ・学年回しで実施している「あいさつ週間」の取組がマンネリ化している傾向があるので、取組の方法を見直す必要がある。
教育活動	○安全対策	危機管理及び安全対策の強化	・自分の身は自分で守るという意識を持つ児童を育てる。 ・自転車の正しい乗り方ができるようにする。	・関連機関と連携し、不審者対応避難訓練や交通安全教室を実施する。 ・学級活動、全校朝会等の機会を活用し、自転車の乗り方や身の安全を守る方法を指導する。 ・登校時のPTAや交通指導員の立ち番、下校時の見守り隊との協力体制を維持・継続する。	A	・関係機関と連携して、避難訓練、交通安全教室、自転車教室等を全て計画的に実施することができ、火災、不審者、交通安全に対する意識が高まった。 ・「感謝の会」に見守りたいの方を呼んで、児童とボランティアの意識を高めることができた。	・情報モラルの指導を継続的に行うとともに、保護者を対象にした研修会や講習会を実施し、危機管理意識の向上を図っていく。 ・週の始めなどには、持ち物検査「はんちぼうぼうな」（ハンカチ、ちり紙、帽子、防犯ブザー、名札）を実施したり、防犯ブザーの作動テストを行ったりして、防犯ブザーの所持に対する意識の向上を図っていく。 ・地域コミュニティやPTAとの連携をさらに強化し、児童の安全確保に努めていきたい。

特定課題	●小学校低学年の学習環境改善の充実	基本的な生活習慣、学習習慣の定着	・あいさつや返事が元気にできる児童90%を目指す。 ・毎日宿題をきちんとできる児童90%を目指す。	・あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・決まった量の宿題を出し、宿題はその日のうちに点検し返すようにする。 ・保護者と連携し、協力を得て達成する。	A	・教室入出時のあいさつの仕方を徹底的に指導してきたところ、自ら進んであいさつができるようになってきた。 ・担任及び級外職員の頑張りにより、宿題は全ての児童が毎日きちんと取り組み、提出することができている。	・低学年は特に目立った問題行動等はなく、全体的に落ち着いた学校生活を送ることができている。 ・あいさつについては、今後はあいさつの大切さを伝えたり、具体的にいつ、どのような時にあいさつをすればよいのかをソーシャルスキルトレーニングを取り入れたりして、ワンランク上のあいさつの仕方を指導していく。 ・宿題は放課後学習塾で済ませる児童に対しては、家庭での学習机に向かう習慣や自主学習などの取組について啓発をする。

② 思いやりのある子ども（特活） 心の育成

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
教育活動	●心の教育	思いやりの心の育成	・集会活動や縦割り班活動を通して，思いやりのある心，自己有用感を高める。	・学年や全校の場で出番をつくり，達成感を持たせる。 ・縦割り班活動の推進によって、高学年のリーダー性と思いやりの心を育む。 ・集会活動や学習発表会を通して，友だちのよさを認め合う。	A	・縦割り遊び等では、下級生のことを考えた計画づくりができるようになった。また、活動の準備も進んで取り組む姿が見られるようになった。 ・6年生の思いやりの心が、下級生にも伝わり、児童アンケートによると「友だちにやさしく接することができた」と答えた児童の割合は95%を超えていた。 ・人権週間には、人権擁護委員に来ていただき、紙芝居や人権にかかわるDVDを視聴し、意識を高めることができた。また標語づくりや相手に対する言葉遣いについて考えさせたところ、人権に対する意識が高まり、思いやりの心も育ってきた。	・全体的に優しく、思いやりの心をもった児童が多く、特に6年生ではその傾向が強く、下級生へよい影響を与えている。 ・次年度も異学年との交流を通して思いやりの心が育つように、縦割り活動などを計画的に進めていく。 ・次年度6年生になる児童は今年度の6年生とは雰囲気が違い、やや活発である。反面情にもろい児童が多いので、そのよさを生かしながら最上級生としての自覚やリーダー性を育てていきたい。 ・全学年を通して、これからの行事等の中で、常に役割を与え、出番を作っていくことで、さらに自己有用感を高めていきたい。　・本年度は機会に恵まれ、11月にはオーケストラ公演、2月にはジャズ演奏を聴くことができ、児童の情操面での育成にも大いに役立った。
	●いじめの問題への対応　（学級経営）	多くの目や手をかける学級経営	・一人一人のよさを認め合い、いじめのないクラスづくりを目指す。 ・学級が孤立しないよう、同一歩調の指導を行い，「学校が楽しい」と言える児童95%を目指す。	・自分や友だちを大切にし，思いやりの心を育む学級活動や道徳の授業を大切にする。 ・いじめアンケートを各月実施し教育相談週間を設定する。 ・QUテストを実施し，学級経営力を高める。	B	・児童アンケートによると「学校は楽しい」と答えている児童は、95パーセントを超えており、目標を達成している。しかし、一方で「いじめアンケート」では、1割強の児童がいじめがあると感じている。 ・2回行ったQUテストでも、学級集団満足群の割合が高くなっている。	・本年度より週1回支援の必要な児童に関する情報交換会を実施したところ、全校で支援をしていこうという職員の意識が高まってきた。次年度もそうした体勢の継続と、取組の充実を図っていきたい。 ・教育相談だよりに、スクールカウンセラーによるコラムのコーナーを設けたことにより、それを保護者読んで家庭での指導に生かしたり、正しい理解につながったりして、たいへん効果があった。
	○特別支援教育	支援体制の確立	・特別支援教育に関する専門性を高めるために年に3回の校内研修を行う。 ・支援を必要としている子を把握し、個に応じた支援を行う。	・関係機関と連携し、専門の講師を招聘して職員研修を行う。 ・児童一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高めるため適切な指導及び必要な支援を行う。 ・必要に応じて、個別の支援計画を作成する。	B	・必要に応じて個別の支援計画を作成し、それに基づいた支援を行うことができた。 ・週1回の教育相談員来校のおかげで、客観的な情報を得ることができ、該当児童に対する指導支援が充実した。	・通常学級に在籍する支援を必要とする児童を的確に把握し、その子に応じた支援を行う。 ・教育相談員やスクールカウンセラーとの連携を更に強化し、全職員による共通理解、指導の統一を図っていきたい。 ・スクールカウンセラーや教育相談員の活用を、学校のみならずもっと保護者等にも呼びかけていき、学校と家庭が一体となって児童の支援にあたっていけるような体勢を築いていく。

③ たくましい子ども（保体）保健・体育

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
教育活動	●健康・体つくりの推進	・心身ともに健康な児童の育成	・体育科の授業の充実を図り、運動が好きな子どもを育てる。 ・遊び場の環境を工夫し、外遊びを奨励する。	・体育の授業づくりについて意見交換をする場を設ける。 ・「にこにこタイム」や体育委員会の掲示板などを使って外遊びを紹介し、その遊びの楽しさを伝え、外で体を動かして遊ぶようにすすめる。 ・一輪車週間やなわとび週間を設け、達成感や遊びの楽しさを体感させる。	B	・天候に左右されず、外遊びを楽しんでいる児童が多い。 ・体育委員会によるスポーツレクリエーションの取組は、スポーツや身体を動かすことの楽しさを実感させることにつながった。	・外遊びの奨励をさらに継続するとともに、月ごとにいろいろなスポーツや遊びを紹介して、さらに楽しめるような手立てを講じる。 ・スポーツレクリエーションの取組について、その内容や参観人数の調整などについてさらに検討し、より効果のある取組を行っていきたい。 ・体育主任による体育の授業に関する研修を行ったり、資料の共有を図ったりして、体育の楽しみを味わわせていきたい。

教育活動	○望ましい生活習慣の形成	・健康的な生活習慣の定着	・「早寝・早起き・朝ごはん」が習慣化できている児童を 90%を目指す。 ・年間を通して、立腰・手洗い・うがい・歯みがき・帽子着用を実践し、健康管理ができる。 ・毎月１日にノーテレビ・ノーゲームデーを実施し、実施率を 70%以上にする。	・定期的に「蛍っ子カード」（生活点検表）を実施し、親子で生活習慣を見つめ直しながら、望ましい生活習慣の定着をはかる。 ・手洗い・うがい・歯みがきを習慣化し、感染症予防に努める。また、歯科校医・保健センターと連携し、歯科保健指導をすすめる。 ・メデイアの影響について知らせ、時間を決めて利用できるようにする。 ・ノーテレビ・ノーゲームデーについては、家庭の状況に応じて実践する。保護者にも協力を呼びかける。	A	・養護教諭のアイデアや指導により、手洗いやうがいの習慣化が図られている。 ・2月の調査では、ノーテレビの実施率が97%、家読の実施率が58パーセントと、取組が定着してきた。 ・「蛍っこカード」（生活点検表）の取組の効果が上がっている。	・継続指導や個別指導を今後も継続していくが、ひとつひとつの内容や方法を精査し、改善策や新しい取組を考えていく。 ・次年度は保健委員会を独立して立ち上げ、委員会活動を中心に本校の健康問題について具体的な取組を行っていく。
	○望ましい食習慣と食の自己管理能力の形成	・食事のマナーを守り、好き嫌いなく食べる児童の育成	・好き嫌いをしないでしっかり食べる。 ・食器の持ち方や姿勢に気をつけて食べる。	・食育の授業や給食だより、給食委員会の発表などを通して、食の大切さを知らせる。 ・5月・10月は、担任が実態を把握し、正しいマナーを身につけさせる。	A	・健康委員会を中心に、学校給食週間の取組として、児童朝会で給食の歴史やクイズなどを発表したり、給食時間にメニューの放送をしたりすることができた。	・学校給食期間中や児童朝会の折に、栄養教諭に来校していただき給食に関する話や朝ご飯の内容、質に関しての指導をしていただくようにしたい。 ・次年度は給食委員会を独立して立ち上げ、常時活動以外での委員会活動の幅を広げ、広報活動や啓発活動等さらに活動を活性化していく。 ・食器の破損について、次年度は0になるよう指導を徹底していきたい。

④　学び続ける子ども（学習）　学力向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題
教育活動	○学習習慣の定着	基本的な学習習慣の定着	・話をしている相手を見て、最後まで聞くことがよくできる児童80%を目指す。 ・家庭学習も、怠けずに取り組んでいると答える保護者90%を目指す。	・話を聞く習慣づけの徹底指導 ・「読む」「書く」「計算」の宿題を継続的に取り組む。 ・「家庭学習の手引」「市学びの習慣づくり」等の保護者への配布・説明を行い学校・家庭が連係して取り組む。	B	・保護者アンケートにより「子どもたちはよく話を聞いている」と答えた割合は97%、児童アンケートによると同項目の割合は96%で、ともに目標数値を超えており、どの学年も聞こうとする態度は定着してきた。 ・保護者アンケートにより「家庭での勉強にきちんと取り組んでいる」と答えた割合は81%で目標に達することができなかったが、後期から市が取り組んでいる「放課後子ども学習塾」の効果にもよるものと考えられる。	・学習規律等、再度全職員で共通理解をして取り組んでいく。 ・筆箱の中身の統一について、全校的に定期的な点検を行うなどして、授業に関係のない物を持ってこさせず、授業に集中して臨めるような環境づくりを行っていく。 ・放課後学習塾との連携を図っていくとともに、県からのリーフレットなどを活用し、家庭学習の習慣化に向けた指導を家庭とともに取り組んでいく。
	●学力の向上	算数科における活用力を育てる指導方法の工夫	・算数科において、児童の思考力・表現力を高めるための授業づくりを通して、活用力を育てる。 ・算数科の標準学力検査において、各学年全国平均以上を目指すとともに、昨年よりも下回らないようにする。	・思考力・表現力を高めるような授業づくりを行う。 ・児童の興味・関心・意欲や思考を引き出すための教材の研究・開発を行う。 ・児童の実態に応じた少人数指導・TT指導を充実させる。 ・計算タイムや補充学習について級外も加わり、全職員で指導に臨む。	A	・全学年で思考力、表現力を高める研究授業を行い、研修会を深めることができた。 ・「活用タイム」の実施により、児童の思考力・表現力の伸長を図ることができた。 ・児童の個人差に対応した指導を計画的に実施することができた。 ・佐賀県学習状況テストでは、４月の結果があまり良くなかった学年について、担任も含めた級外職員等による全校的な指導を実施したところ、２月の結果ではかなり向上していた。	・活用力を高めるために、さらにテーマをしぼって取り組んでいきたい。 ・学年によっては学力差がたいへん大きい学年もあるので、今後も個に応じた指導と基礎・基本の定着に努める。また、活用力を身に付けさせるための指導を行っていく。 ・各種学力テストの分析や考察を行い、必ず実践するように職員の共通理解を図る。
	○読書指導	読書指導の推進	・年間60冊の読書を達成する児童を各クラス90%以上を目指す。 ・いろいろなジャンルの本に挑戦できる児童を増やす。	・30冊達成者は「読書の木」に名前を張り出すとともに、60冊達成した児童を昼の放送で紹介する ・教師や保護者ボランティアによる読み聞かせを実施するとともに、図書館祭りの機会を利用し、読書への意欲を喚起する。 ・「親子読書回覧板」を実施し、家庭でも読書をするきっかけを与える。	A	・読書の木や図書館まつり、巡回図書等の取組により、全校の平均貸出冊数が166冊と読書の推進につながった。 ・ほぼどのクラスも90%以上の児童が、60冊を達成することができた。 ・余剰時間には読書に取り組もうとする児童が増えた。	・今後も今年度のような取組の継続と徹底を図るとともに、学年相当にふさわしい本の紹介をしたり、あらゆるジャンルの本を読むように啓発していく。
	●ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育指導の推進	・コンピュータや電子黒板、インターネット等を活用して、授業に主体的に取り組む児童を増やす。	・教職員がICTを活用した実践的な教育活動を行うことができるように職員研修の充実を図る。 ・情報化推進リーダーを中心とした校内研修体制を整える。	C	・活用のための研修を行ったり校内授業研でICT機器を活用したりして、全職員で共通理解や実践を深めることができた。 ・ICT支援員の協力により、ICT機器を使った授業実践を充実させることができた。 ・一方で、積極的なICT利活用についての環境整備や意識の高揚までには至っていない。	・今後も職員によるICT利活用の研修の充実を図ったり、児童への活用推進を促したりしていく。 ・次年度は3年生以上の学年に電子黒板が整備され、また国語科や算数科の電子教科書が導入されるので、さらに活用の広がりが期待できる。 ・ICT機器と従来の黒板指導やノート指導などを併用した効果的な取組を行いたい。

本年度の重点目標の評価項目として含まれていない共通評価項目がある場合に記入する。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由		成果と課題

学校運営	○魅力ある学校づくり	地域・保護者と連携した児童の育成	・地域人材を活用した体験的な学習活動を行い、豊かな心を育成する。 ・地域関係団体、保護者等と連携して、基本的な生活習慣の徹底を行う。	・各学年に地域人材を生かした学習活動を教育課程に位置づけて実施する。 ・地域関係団体との協議の場を設け、学校の教育活動について理解を求め、支援を要請する。 ・地域・保護者との連携で、あいさつ等の基本的生活習慣の徹底を図る。	A	・2年生の野菜作り、5年生の米作り・蛍の里づくりなど、地域コミュニティや地域の人材の多大な協力を得た取組ができた。 ・また、地域コミュニティとの話し合いにより、保護者も巻き込んだ取組について推進してきたところ、保護者の参加率が向上してきた。 ・見守り隊との連携により、防犯についての取組体勢は十分に確立できている。	・地域人材を活用した教育活動を更に探り、積極的に依頼し、推進を図っていく。 ・学校での児童の実態を地域や保護者に積極的に発信し、更に協力依頼をするとともに、相互に連携した活動を推進していく。 ・基本的な生活習慣の育成については、学校からの一方的なお願いが強く、保護者等への啓発及び相互連携について、今後も取り組んでいく。

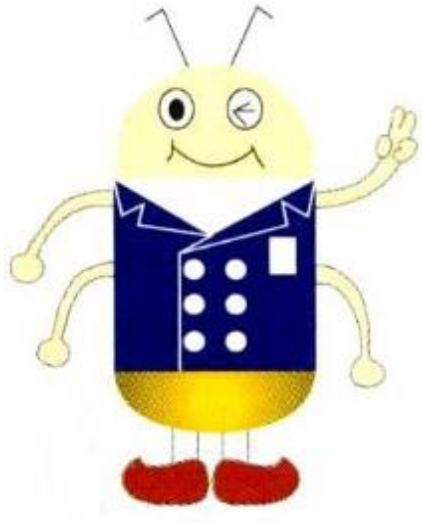
●は共通評価項目、○は独自評価項目

6　総合評価

年度初めに学校長が示した学校目標にそって、評価項目の設定や実践を行ってきたが、全体的には概ね達成したと思われる。特に本校は大草野地区コミュニティや支援団体である益世会の多大なる協力により、地域と協働した教育活動を展開することができたことは何よりである。

学力向上に関しては、校内研修を核として、思考力や表現力を養うための授業実践に取り組んだり、年度初めの佐賀県学習状況の結果が芳しくなかった学年に対しては、真摯に受け止め改善策を練って計画的にかつ組織的に取り組んだ結果、一定の向上を図ることができたことは何よりである。また、豊かな心の育成に関しても、教育相談の充実や、支援の必要な児童に対する情報交換会などをとおして、全職員による一貫した指導を行ったり、オーケストラ公演やJAZZコンサートなどの鑑賞など情操を養う活動を多く取り入れたりして、ある程度の成果を得ることができた。

評価時期については、昨年までは、7月に中間評価を、12月に年間評価を行っていたが、本年度はもう少し長いスパンで教育活動を評価するという意味で、中間評価を体育大会や1学期が終わった9月末に、年間評価を風邪予防などに取り組んだ2月末までに行った結果、幅広く多面的な評価を行うことができた。また評価方法では、児童自身による自己評価や保護者の評価を真摯に受け止めたり中間評価との比較を通してその変容を注視したりしてよりよい改善策を協議した。職員の評価については、各部や関係職員による評価など、全職員で組織的に行い、改善策を講じてすぐに実践するなど、PDCAサイクル方式で実践できたと思われる。



7　来年度の改善策

○大草野コミュニティや益世会との協議や連携をさらに強化するとともに、保護者も巻き込んだ教育活動を推進し、学校、家庭、地域が一体となった教育活動の推進を図る。
○学校評価計画と教職員一人一人の自己申告目標をタイアップさせることで、学校目標の具現化と全職員で取り組む学校評価をさらに推進していく。
○学校運営協議会の委員による授業参観や行事の参観の機会を増やすことで、客観的な評価やアドバイスを受けたり、改善策を講じたりして、よりよい児童の育成と学校運営を目指し
○鳥栖スタジアムの天然芝移植が終わり、芝を利用した体力向上に努めたり、地域との連携を深めたりして、スクールコミュニティとして一層成長していきたい。
○学力向上対策として、放課後子ども学習塾と本校職員の連携を深め、個に応じた指導方法の改善を図っていきたい。